

メソアメリカの装飾墓

河 野 一 隆

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# メソアメリカの装飾墓

河野一隆

## 1. はじめに

### (1) 装飾墓の比較研究の意味

装飾墓とは、遺骸を埋葬するための墓室および外表が加飾された墓を指す。ただしその定義は明確とは言えない。墓室に彩色壁画が描かれていれば装飾墓であるが、埴輪のように、様式としての埋葬法の構成要素として不可分である場合はことさら装飾墓とは呼べない。「装飾墓」と「非装飾墓」が排他的に存在し、かつ後者が主流である場合にはじめてこの分別が意味を持つ。したがって「装飾墓」とは、相対的に定義される埋葬法の一つなのである。

埋葬のための空間が墓ならば、その機能において装飾は不可欠なものではない。しかし、大多数が無装飾で占められた共同墓地の中に忽然と出現した装飾墓は、築造当初には何らかの意味を有して加飾されたに違いない。それでは、人はなぜ墓を飾るのだろうか。それは、人間が来世をどのように捉えたかという宇宙観に基づいた根源的な問いでもあり、現代に残された、都市や文字などのさまざまな遺産と同様の地平にあると捉えるべきである。

しかし、日本列島における装飾古墳(装飾墓)研究は、古墳文化の中核たる近畿地方中央部に分布が希薄なことをもって極めて低調である。むろん、たとえば中国・湖南省長沙馬王堆1・3号墓で副葬された銘旌や帛画などのような有機質に加飾され、消滅したために考古学的に認知できない可能性はあるけれど、いまだ実証されていない。また、九州中・北部では特に、筑紫君磐井の乱という国際的な動乱が起こったため、この事件と装飾古墳の盛行とが強く結びつけられてきた。たとえば石人石馬を墳丘に樹立する風習が王権によって否定され、地下に潜って物語風装飾古墳が成立したとする見解もその一つである<sup>(註1)</sup>。さらに九州が朝鮮半島や中国大陸に近いため、福岡県の珍敷塚古墳や竹原古墳のような、画題中に挿入された中国思想に由来するモチーフの存在をもつて、墓を加飾する風習自体が中国や高句麗の装飾墓文化との接触により一回起的に出現したとみる見解もある。これらの底流に共通するのは、装飾墓とは政治的事件や文化的接触によって登場した偶発的なものとする見解である。しかし、資料を収集すると、これは誤りであることにすぐ気づか

される。装飾墓とはむしろ、王墓と同様に人類史的な視点から把握されるべきもので、日本列島の古墳文化のようなローカルな要因に帰すべきではない。

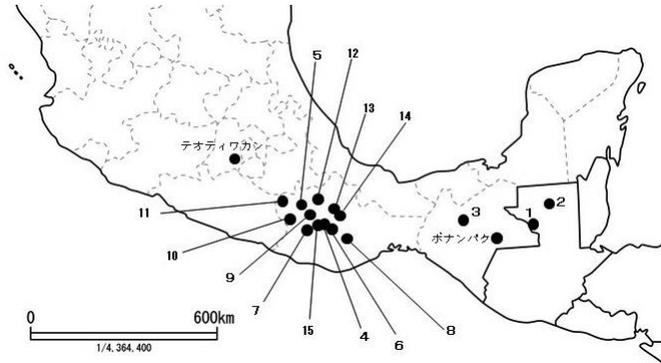
本稿ではこの視点から、メソアメリカの装

飾墓に光を当てる。メソアメリカとは、北はメキシコから南はパナマ地峡へといたる地域で、とくにテオティワカン、マヤ、アステカなど多彩で特徴的な文明、文化が開花した。かつてメソアメリカでは、考古学の分野でも装飾墓の実態がほとんど知られていなかった。ところが、メキシコ国立自治大学 (UNAM) によってメキシコ国内の悉皆的な壁画調査成果が公表され、それがグアテマラ高地のティカルを中心とするマヤとは異なったあり方を示すことが分かってきた。とは言え、装飾墓に光を当てた研究が依然少ないために、新大陸の装飾墓を旧大陸に匹敵するものと評価する見解は見られない。そこで本稿では、メソアメリカの装飾墓を紹介し、その変遷過程がエジプトや中国と同じ構造に整理できることを示すことにしたい。その前に、装飾墓の人類史的な展開について簡単に整理しておく。

## (2)装飾墓の展開過程

最古の装飾墓の実態は良くわからない。紀元前3千年紀の初めに築造されたアイルランドのニューグレンジでは石室入口に渦文を刻んだ石が置かれていた。ブリテン島北部やアイルランドでは幾何学文装飾が多く、フランス北部には斧を抽象的に形象した文様が刻まれる。イベリア半島の北西部、アンテラスには赤と黒の顔料を使ったモチーフが描かれる。もっとも、写真測量の成果によると彩色された文様はもっと広がっていて、肉眼では確認できていないだけだとする見解もある。

新石器時代の装飾墓はヨーロッパ北部を中心とするが、エジプトでも彩色壁画が突然出現する。上エジプトのヒエラコンポリス第100号墓である。ヒエラコンポリスは、エジプト王権の成立にきわめて大きな役割を担う地であるが、この第100号墓だけはそれ以前の共同墓地から離れて造営された。その画題も、赤・白・黒の顔料が用いられ、ゴンドラ型の船や闘争したり、動物を仲裁する人物が描かれる。他方、エジプトから遅れること1000年ほどして中国華北の大平原、河南省安陽に殷大墓が築造される。平面形が「亜」字形で被葬者が殷王の一人に当てられる侯家荘第1001号墓である。埋葬施設は木槨室で詳細は不



第1図 対象とする遺跡の位置(番号は本文と対応)

明だが、内面の壁上に雷文様の渦巻文、猪牙を象嵌した長方形文を彫刻し、赤色顔料を塗布した破片が出土している。もしこの破片が墓室装飾の一部であれば、中国の装飾墓の登場は殷代に遡る可能性もある。その後、エジプト・中国では装飾棺の発達が見られるが、墓室装飾が大きな転機を迎えるのがそれぞれ古王国、漢代以降である。エジプト第3王朝のジョセルの階段ピラミッド複合体では、周壁内に築かれた葬祭殿の壁が青色ファイヤンスで加飾され、第5王朝以降はピラミッドテキストによってオシリス信仰が記された。中国でも漢代には満城1号漢墓のように崖墓内部に瓦葺建物を建てたもの、空心磚墓や画像石墓など多彩さを増す。さらに中国では南北朝期に装飾墓の様式的な確立が認められ、唐代には墓主の生活や女官群像、制度などが可視化される。一方、エジプトも新王国でアマルナ様式など幾度かの美術様式上の画期を経つつ、装飾墓の文化が最盛期を迎える。

この2地域を核として、周辺に描画規則を忠実に踏襲した装飾墓の風習が伝播していく。まず、エジプトの描画規則とは、階層的な上下に応じ人物像の大小を描き分け、顔は側面、上半身は正面、下半身は側面とするもの。これを踏襲する地域が、ヌビア(スーダン)である。一方、中国も階層による大小の描き分けがあるが、顔は正面、あるいは完全な側面でなく、顔であれば鼻の向こうの目など見通しを表現している。これは、モンゴル、契丹(遼)などに伝播する。つぎに埋葬施設や画題が異なるが、描画規則は遵守される地域がある。エジプトの場合はエトルリア、トラキアであり、中国の場合は高句麗である。一方、この2地域の伝統に乗らない地域として、日本の九州、インドネシア(スマトラ・パセマ高原)、キプロス(サラミス)、チュニジアなどが挙げられる。これらの地域では、エジプトや中国という求心力のある装飾墓の伝統とは独立しているが、インドネシアではオーストロネシアの拡散やシュリービジャヤ王国の海洋交流、キプロスやチュニジアはフェニキア人の移動などの海洋交流と関連性が示唆されることが特徴的である。

以上の概観を踏まえて、メソアメリカの装飾墓について検討を加えたい。

## 2. マヤの装飾墓

### (1) ティカル(第1図1)

ティカルは低地マヤ南部における王権の誕生を示す重要都市で、1世紀末に王朝が誕生し10世紀半ばに衰退した。特に紀元682年に即位したハサウ・チャン・カウールI世は1号神殿を建設し、内部に埋葬された。ペンシルバニア大学考古学人類学博物館の調査によると、北アクロ

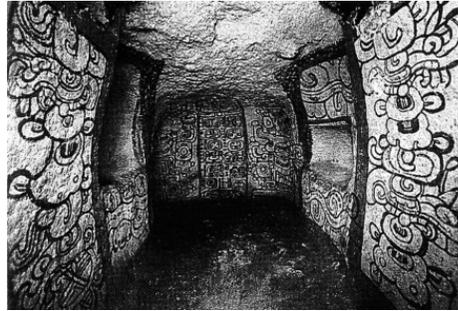


第2図 ティカルの彩色壁画墓  
(注5より)

ポリスの古典期前期の寺院とされる5 D-33建物の地下から装飾墓(第48号墓)が発見された。岩盤を削りぬいた墓室に漆喰で下地を調整して象形文字が表され、457年3月18日に閉塞されたことが分かった(第2図)。墓室内には2人の若者が両側に配され、中央に高位の人物が埋葬されている。

(2)リオ・アスール(第1図2)

リオ・アスールはティカルの北東、ジャングルに埋もれた古代都市で、ティカルの3分の1程の規模である。1960年代に発見され部分的に調査されたが、1983年から1987年にかけてR.E.W.アダムス率いる調査団によって古典期前期のマヤ都市の姿が浮かび上がった。<sup>(注6)</sup>385年にティカルの前線基地として都市建設が開始され、530年までの間



第3図 リオ・アスールの彩色壁画墓  
(注6より)

に700基以上の建物が建てられた。530年頃、リオ・アスールは他のマヤ都市と同様に突然の終焉を迎える。この遺跡では、装飾墓が複数発見されている。C-1建物内にある1号墓はティカル同様の洞室墓の形状で漆喰で下地を調整し、赤色顔料を塗布した後で象形文字が全面に記されていた(第3図)。A-3建物内の12号墓には、450年に行われた「6つの空」と呼ばれた被葬者に対する葬送儀礼について記されている。

(3)パレンケ(第1図3)

古典期のマヤを代表する遺跡の一つである。<sup>(注7)</sup>先古典期後期に居住が始まり、431年のパラム・クック1世の即位以降、18代の王が確認されている。考古学史上、特に有名な発見は650年頃にパカル王(キニチ・ハナーブ・パカルI世)が建造した「碑銘の神殿」ピラミッド内部に造営された王墓であった。築造面に墓室を造営し、神殿床から階段を下降する構造で、墓室内の巨大な石棺には胎児の姿勢をとって世界樹を登り他界へ赴くパカル王のレリーフが表され、石棺側面や墓室にも祖先の王たちやマヤの神々の姿が彫刻される。このパカル王墓はマヤでも装飾墓が王墓に採用されたことを示しているが、隣接する13号神殿に埋葬された「赤の女王」は、被葬者がパカル王妃のツァクブ・アハウに否定されているものの、石棺や遺骸に辰砂が散布されたのみで装飾的な要素に乏しい。また、カラクムルでも王墓が確認されているが、パカル王墓のような装飾墓とは言えない。マヤでは、ポナンパクの壁画のように彩色による描画技法が発達し、将来的に彩色壁画による装飾墓が発見される可能性は否定できないだろう。

### 3. オアハカの装飾墓

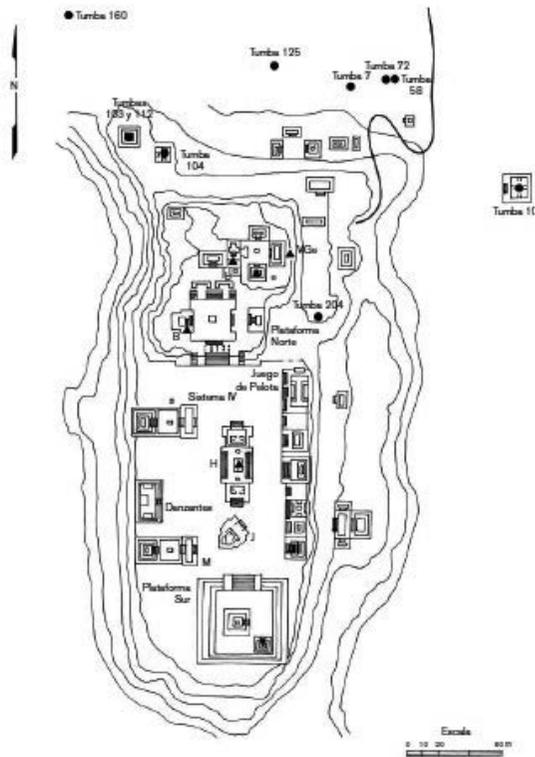
#### (1) モンテ・アルバン(第1図4)

メキシコ南部のオアハカ盆地の中核であるモンテ・アルバンは、紀元前500年頃に建造が始まり紀元後800年頃に衰退した。サポテカ王国の中心都市で、後にミシュテカ族が居住した。装飾墓として7・10・72・103・104・105・112・125・160の9基が確認されている(第4図)。

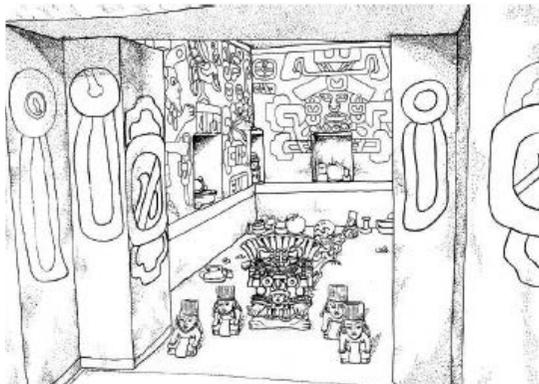
7号墓は建物地下に営まれ、狭長な玄室と長方形前室からなり、天井は板石を寄棟形に掛け渡す。石積表面に漆喰を塗布して下地調整し、赤で絵文字が表され、青や黄色を加えて人物かと思われるモチーフが確認できる。築造はサポテカ期だが後にミシュテカによって再利用され、死と再生を司るシベ・トテック神を象ったような黄金製胸飾りや玉類、トルコ石を象嵌した鬘髻、アラバスター製容器など豊かな副葬品が出土したことで大きな話題となった。72号墓は長方形玄室で奥壁に近い両側壁2ヶ所に龕を持つ。薄い赤で下地とし、絵文字が主モチーフである。103号墓は建物地下に営まれ、楣に描かれた青い波が印象的である。

(注8)  
104号墓はモンテ・アルバンを代表

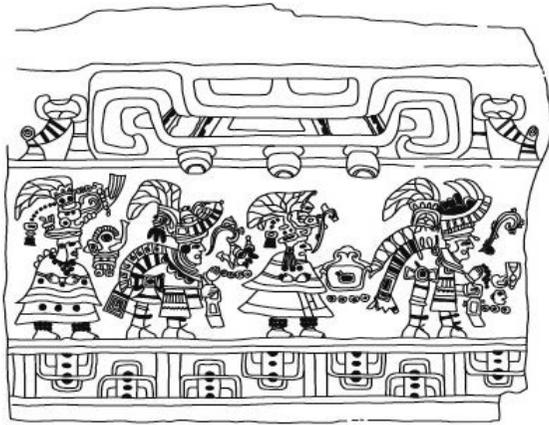
する装飾墓で、復元模型がメキシコシティの国立人類学博物館で公開されている(第5図)。長方形玄室で両側壁および奥壁に1ヶ所ずつ、および奥壁と側壁の各コーナーに都合5ヶ所の龕が設えられている。床面には頭部を奥に向け伸展葬された人骨が検出され、過剰に



第4図 モンテ・アルバンの装飾墓の分布図  
(注8より)



第5図 モンテ・アルバン第104号墓  
(注8より)



第6図 モンテ・アルバン第105号墓左壁の壁画  
(注9より)

アルバンの装飾墓では最も精巧な彩色壁画で、奥壁には対面する2名の像、両側壁には奥壁側に向いた4名の盛装人物が配置され(第6図)、絵文字が各所に充填されている。112号墓も人物を主モチーフとした彩色壁画で、側面観の人物文の上下を波状文で区画される。125号墓も精巧な画題で、楣に絡み合う2匹の蛇や対向する獣、入口両側には左向きに人物や動物の正面観が描かれている。160号墓は幾何学文装飾が主体である。

装飾された人物を象った香炉、土器類などが副葬された。この壁画の画題は、奥壁中央の龕の上面に正面観の顔を配し、両側壁はそれに向かつて盛装した側面観の人物像を入口側に2体、このほか鳥や獣頭などを側面観で表している。薄い赤を下地とし、濃い赤、青、黄色、白などの顔料が使用される。105号墓は十字形の玄室で、全面に彩色壁画が施される。モンテ・



第7図 スチルキトゥンゴの装飾墓  
(注10より)

(2) スチルキトゥンゴ(セロ・デ・ラ・カンパーナ)(第1図5)

スチルキトゥンゴでは4・5・6号の3基の装飾墓が確認されるが、最大規模の5号墓は、オアハカはもちろんメソアメリカでも白眉となる装飾墓である(第7図)。埋葬施設は前・後室からなる複室構造の石室で、前室には両耳室が付属する。入口上部には漆喰による過剰装飾の人物像が飾られる。前室から各室に向かう入口には、人物レリーフを表した赤彩された装飾柱が取り巻く。興味深いのはレリーフ装飾が認められるのは柱部分のみで、玄室および耳室内の各壁面は漆喰で下地調整した後に地色によって描く。使用された顔料は、濃い赤、白、

黄色、青でオアハカの他の装飾墓と共通する。また玄室は奥壁に1ヶ所の龕を持ち、その前にレリーフで絵文字を刻んだ碑石を立てる。

(3)ラムビティエコ(第1図6)

ラムビティエコでは6・11の2基の装飾墓が確認される。とくに6号墓<sup>(注11)</sup>では墓室入口の楣の上面に、正面観の顔を2つ並列して配置する。その周囲は幾何学的に区画され、赤と白で塗分けられている。

(4)サァチラ(第1図7)

サァチラでは1号墓<sup>(注12)</sup>が装飾墓である。入口の楣上面には幾何学文レリーフを配する。墓室は前・後2室からなる装飾墓で翼を広げた鳥を腹側から見た正面観が特徴的である。

(5)ミトラ(第1図8)

ミシュテカ期の中心都市ミトラでは、教会地区、流水地区などに建てられた建造物で彩色壁画が施されているが、装飾墓は列柱地区のパティオFに造営された1・2号墓で確認されている。

(6)ウィソ(第1図9)

ロサリオ地区の1号墓、「王たるキリスト万歳(Viva Cristo Rey)」地区の1号墓の2基の装飾墓が知られる。前者は楣上面に4つの彩色された髑髏を配列する。後者は同じ場所に、赤1色で幾何学文を描いている。

(7)ユクンダウィ(第1図10)

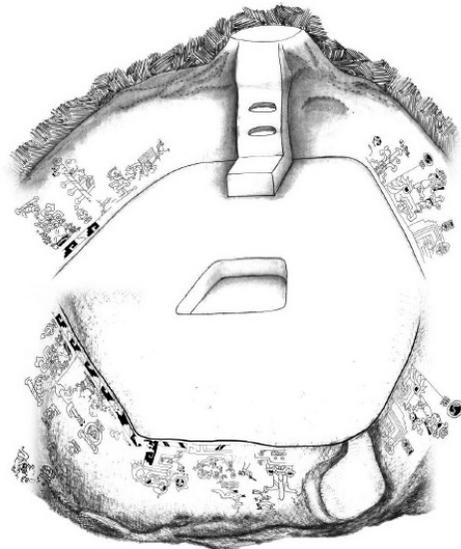
長方形で平天井を持つ1号墓<sup>(注13)</sup>の玄室内から墓誌と目される正方形の石が3つ出土している。それらには赤1色で絵文字が表されている。

(8)ウァユアパン・デ・レオン(第1図11)

サンタ・テレサ地区の2号墓<sup>(注14)</sup>では、墓室へと降りる階段に幾何学文が彩色装飾されている。使用された顔料は赤、緑、黄色、黒の5色である。他の装飾墓のようにモチーフや文字を主要画題とするのではなく、墓室を建築物と見立てて飾られている。

(9)ハルテペトゥンゴ(第1図12)

装飾墓は1号墓<sup>(注15)</sup>であるが、その形態はオ



第8図 ハルテペトゥンゴの装飾墓  
(注15より)

アハカではかなり特異である。墓室は岩盤を削り貫いた楕円形の洞室墓で、中央に方形の窪みがある(第8図)。装飾は内壁全体に赤1色で絵文字や人物、植物などを表す。低地マヤ南部と埋葬施設の構造が類似するが、具象的なモチーフが登場する点が異なっている。

(10) ジョロクス(第1図13)

岩盤を削り貫いた装飾墓で、長方形の墓室に階段で降りる構造である。奥壁および両側壁に1ヶ所ずつ龕が設けられ、板石をかけた平天井を持つ。6号墓は内壁に幾何学文や絵文字<sup>(注16)</sup>が赤1色で表される。8号墓は赤・青の直線で内壁を区画し、幾何学文を描いている。

(11) サン・ファン・ブランカ(第1図14)

1号墓は石積の後、漆喰で下地調整を行い、青や黄色、赤の顔料で文様が描かれる。復原図によると、他のオアハカの装飾墓のように薄い赤で下地を構成せず、青が主体となる点で、マヤの彩色絵画との共通性をうかがうことができる。

(12) アツオンパ(第1図15)

近年の調査で発見された。葬祭専用の建物内部に3つの複合する墓室が営まれ、その内の1基が装飾墓であった<sup>(注18)</sup>。平天井の長方形玄室で、奥壁・両側壁に彩色壁画がある。赤・白・黒の3色が用いられ、濃い赤を下地に黒で縁取られた白い円文を主モチーフとし、絵文字も表されている。なお、この複合した墓室で最初に造営された墓の入口には、今なお鮮やかな色彩を放つ「地震の王」、「水の女王」という2体の人物形象土製品が置かれていた。

#### 4. メソアメリカの装飾墓の意味

##### (1) メソアメリカの装飾墓の伝統

以上、概観したメソアメリカの装飾墓は、マヤとオアハカとで画題や埋葬施設の構造などに共通点と顕著な相違点とが指摘できる。マヤのティカル、リオ・アスールで確認されるマヤ低地南部の装飾墓の特徴を列挙すると次の通りである。

- ① 建物やピラミッドの地下および内部に営まれる。
- ② 岩盤を削り貫いて漆喰で下地を調整した洞室墓である。
- ③ 画題はマヤの象形文字を中心とした被葬者や王の事績を彩色で記すものが中心で、その中には暦年代を表すものがある。
- ④ レリーフ装飾(パレンケ・パカル王墓)の広がりについては不明である。

一方、オアハカの装飾墓では、

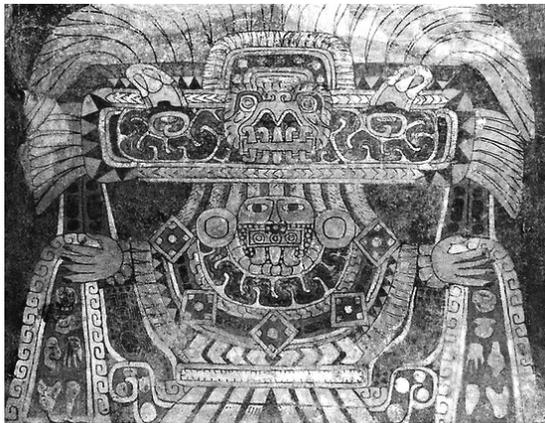
- ① 建物やピラミッドの地下に営まれるものと単独のものがある。
- ② 地下に石を積んで墓室を構成し、表面を漆喰で下地調整してカンバスとする。岩盤を削り貫いた洞室墓もあるが少数である。

- ③ 画題は絵文字によるテキスト、幾何学文、人物、動植物文などがある。特異な例として彩色階段のような住居に見立てたものもある。
- ④ 使用された彩色顔料は、薄い赤、濃い赤、青、白、黄色、緑を数える。薄い赤を地色とし、それ以外でモチーフを表すものが多い。
- ⑤ 装飾技法にはレリーフと彩色があり、併用したものもある。

などの特徴を指摘できる。時期的に見ると、マヤの場合は記された暦年代からみて、4世紀中葉～7世紀中葉に絞られ、これは古典期前期後半から後期初頭に差し掛かっている。ちょうど、ティカル王朝が勢力を拡大すると同時に、メキシコ中央高原のテオティワカンからの影響を強く受け、最盛期を迎える時期でもある。またパレンケでもパカル王がトニナなど都市国家間抗争からの劣勢を挽回し、中興の祖としてパレンケ王朝が拡大していく時期に当たっている。つまり、ティカル・パレンケ共に、中核都市間の中心-周辺的な政治構造の確立と装飾墓の築造とが関連していることを示しており、とくに洞室墓内にマヤの絵文字を描く風習はティカル王朝との密接な関係抜きには考えられない。

この一方で、オアハカの装飾墓は、マヤのいずれかの特定都市との関係で成立したものではなさそうである。たとえば、オアハカで装飾墓の築造が最も盛行するモンテ・アルバンで彩色壁画を持つ装飾墓の築造が集中するのは、モンテアルバンⅢ a - Ⅲ b 期である。さらに、レリーフが複合した壮麗なスチルキトゥング5号墓や顔の正面観を楣上に並列したラムビティエコ6号墓はⅢ b - Ⅳに位置づけられ、オアハカでは特異な洞室墓であるハルテペトゥングもこの文化期である。このように整理すると、オアハカではまずモンテ・アルバンで彩色のみを主体とする装飾墓が成立し、次に周辺地域に波及するにつれてレリーフや彫刻などの立体装飾が加味されたり、多様な型式へと変容していることが分かる。モンテ・アルバンのⅢ a 期の始まりは3世紀前半～4世紀後半、Ⅳ期の始まりを8世紀～10世紀と研究者によってかなりのバラツキがあるようだ。しかし、モンテ・アルバンへの居住からかなり時期を経て装飾墓が登場したことになり、一部の装飾墓はミシュテカ以後に下ることも指摘できる。言い換えれば、モンテ・アルバンに装飾墓が登場した後、オアハカに独自の装飾墓の伝統が定着し、サポテカからミシュテカへと居住者が変遷しても、その伝統は失われずに持続したと見ることができる。

実は、装飾墓の定着に見るこのような文化的な構造は、メソアメリカ特有の現象ではなく、エジプトや中国を核とした装飾墓の伝統にも看取することができる。つまり中心-周辺関係で伝播した装飾墓と刺激伝播によって成立した装飾墓である。さらに、描画技法に着目すると、エジプト・中国とは異なった顔面描写に対する規則がうかがえる。先述したように、エジプトでは顔の正面観、中国では側面観が忌避されている。メソアメリカはそ



第9図 テオティワカンの正面観の女神像  
(注20より)

メキシコ中央高原のテオティワカンである。テオティワカンは西暦3～5世紀に最盛期を迎え、「死者の大通り」を軸として「太陽のピラミッド」、「月のピラミッド」、「羽毛のある蛇の神殿」などのモニュメントが屹立した。テオティワカンでは、王墓は可能性のある遺構はあるものの、<sup>(注19)</sup> 確実なものは知られていない。また絵文字らしき記号はあるけれども未解読である。何よりも王権の存否さえ、議論が分かれているのが現状だ。しかし、テオティワカンの建物には<sup>(注20)</sup> 壁画がある。たとえば「ヒスイのトラロック」と以前から呼ばれてきた女性神は、両手を広げた正面観である(第9図)。また、翼を広げたフクロウを下からみた構図の彩色壁画もあって、これはサアチラの1号墓の鳥と同様で、世界的に見ても極めて類の少ない鳥の構図である。また、テオティワカンの壁画には動物・人物の側面観を表したものも枚挙に暇がない。このように、オアハカの装飾墓にはテオティワカンからの影響を否定できず、モンテ・アルバンの南の大基壇で発見された石碑リサにテオティワカンからの使者が王に拝謁している場面が表されたことに象徴されるように、テオティワカンとモンテ・アルバンとの繋がりは実証されている。ところが、テオティワカンの壁画に使用された顔料は、赤・黄・緑・白が主体で、モンテ・アルバン104号、105号墓では顕著な青が目立っていない。メソアメリカにおいて青がよく使われる地域は、テオティワカンではなくマヤである。たとえば、装飾墓ではないがボナンパクやカカシュトラ、カラクムルの建物に表された彩色壁画では、青が印象的かつ効果的な部位に用いられており、マヤの画家にとって青は普通に使いこなせる色であったことを裏付けている。

以上の検討から、メソアメリカのオアハカにおける装飾墓の定着は、テオティワカンとマヤという彩色壁画の文化が先行した地域から、オアハカへ不断の技術的な影響関係があり、その背景の下に独自の埋葬施設の中に壁画を描く風習が取り入れられたことを物語っ

のどちらでもなく、完全な正面観、完全な側面観が共存している。墓室の壁を漆喰によってカンバスとして整えて彩色壁画を描く点は共通するが、以上の特徴はメソアメリカがエジプトや中国とは異なった装飾墓の伝統と評価できる所以である。

## (2)メソアメリカの装飾墓の系譜

それでは、メソアメリカ独自の装飾墓をどのように考えたら良いのだろうか。その時に注目されるのが、

ている。換言すれば、刺激伝播によって成立した装飾墓である。装飾墓の展開には、直接伝播によるものと刺激伝播によるものがあることをかつて指摘したことがあるが、マヤやオアハカの装飾墓の展開からも、それらが鮮明に看取できる。

## 5. おわりに

本稿では、日本ではほとんど知られていないメソアメリカの装飾墓について、主要なものを紹介し、それらが偶発的に出現したのではなく直接伝播と刺激伝播のメカニズムによって成立し、エジプトや中国と匹敵する独自の装飾墓の伝統に乗るものであることを示した。人類史的に俯瞰すると、ホモ・サピエンスの洞窟絵画の普遍的な広がりとは異なって、装飾墓の分布は纏まりとして把握することができ、メソアメリカもその一つと位置付けることが出来る。当地の研究は、これからも大きく進展することが期待されており、本稿もそれによって大きな見直しを迫られることもあるだろう。しかし、人類史として捉えた場合に、メソアメリカが装飾墓の伝統の中でひとつの核を形成していることを強調することで、ひとまず比較考古学的な研究の材料を提供しておきたい。

(かわの・かずたか=九州国立博物館)

- 注1 原口長之「古墳石人の行方」『東方古代研究』第9号 東方古代研究会 1959(小田富士雄編『石人石馬』 学生社 1985に所収)
- 注2 Beatriz de la Fuente, Bernd Fahmel Beyer La pintura mural prehispánica en Mexico, Oaxaca Tomo I・II Universidad Nacional Autónoma de México y Instituto de Investigaciones Estéticas 2005.
- 注3 河野一隆「装飾墓の比較研究 序説」『考古学雑誌』第103巻第2号 考古学会 2021年。
- 注4 Primitiva Bueno Ramírez, Rodrigo de Balbín Behrmann, Luc Laporte, Philippe Gouézin, Florian Cousseau, Rosa Barroso Bermejo, Antonio Hernanz Gismero, Mercedes Iriarte Cela and Laurent Quesnel Natural and artificial colours, the megalithic monuments of Brittany, *Antiquity* 89 Durham University 2015.
- 注5 Edwin M. Shook and Alfred Kidder II The Painted Tomb at Tikal, An important discovery by the Museum's expedition in Guatemala, PENN MUSEUM Vol.4-1 The Penn Museum 1961.
- 注6 Richard E.W. Adams Rio Azul: An Ancient Maya City University of Oklahoma Press 1999.
- 注7 嘉幡茂『図説 マヤ文明』 河出書房新社 2020
- 注8 Alfonso Arellano Hernandez Tumba 104, La pintura mural prehispánica en Mexico, Oaxaca Tomo I Universidad Nacional Autónoma de México y Instituto de Investigaciones

Esteticas 2005.

- 注9 Beatriz de la Fuente Tumba 105 (Monticulo de la Piedra de Letra) ibid.
- 注10 Bernd Fahmel Beyer Suchilquitongo ibid.
- 注11 Bernd Fahmel Beyer Lambityeco ibid.
- 注12 Bernd Fahmel Beyer Zaachila ibid.
- 注13 Laura Rodriguez Cano Yucundahui La pintura mural prehispánica en Mexico, Oaxaca Tomo II Universidad Nacional Autónoma de México y Instituto de Investigaciones Estéticas 2005.
- 注14 Marcus Winter, Esteban T. Cruz Ruiz Huajuapán de León ibid.
- 注15 Raul Matadamas Diaz Jaltepetongo ibid.
- 注16 Susana Diaz Castro Yolox ibid.
- 注17 Susana Diaz Castro San Juan Brranca Tumba 1 ibid.
- 注18 Nelly M. Robles Garcia, Axel Andrade Perez y Eduardo Garcia - Wigueras Ibarra, Conjunto Monumental de Atzompa-Guia de Visita.
- 注19 Leonardo Lopez Lujan and Saburo Sugiyama The Ritual Deposits in the Moon Pyramid at Teotihuacan, TEOTIHUACAN: City of Water, City of Fire Fine Arts Museum of San Francisco·de young and University of California Press 2018.  
Sergio Gomez Chavez The Underworld at Teotihuacan: The Sacred Cave under The Feathered Serpent Pyramid ibid.
- 注20 Diana Magaloni Kerpel La pintura mural y su conservacion Arqueologia Mexico vol.18-nu.,108 2011.